

本を捨てる

上水敬由

ときおり訪れる余震にさまたげられながら、この際思いきって蔵書を整理することにした。蔵書といってもたいした量ではない。質の方もひとさまに自慢できるようなものではない。要はいざというときのために一室のスペースを広げるのが目的。

これまでも何度か手持ちの本を処分したことがある。古本屋に売ったり、ブックオフを利用したり、単純にゴミとして捨てたり、そのときどきの気分できり方を選んできたが、処分した後の何ともいえない欠落感あまり好ましいものではない。

しかし、遺産として扱いに困るものの代表が故人の蔵書であることは間違いない。当節の出版事情から考えて一般人の蔵書に高値のつくはずはなく、どこかにまとめて寄贈するほどのレベルでもない。ただ故人の思いがこもっているように誤

解してしまうのが、残された人間にありがちな「苦勞」だとすると、そんなのは願い下げにしたいということ。

部屋の隅に座りこんで、荷造りひもでも適当な大きさにくくっていきながら、飽ききたときには目についたペーパーバックをばらばらと眺める。

『猪木とは何か?』(芸文社 一九九三)で、平成五年に起きたアントニオ猪木のスキヤンダル(それがどんなものだったか詳しい記憶がない)について村松友視がインタビューに答えている。

「告発している人たちがプロレスのことをちよつと言ったりしてると、その人のレベルがわかる。つまりそのレベルですべて解釈してるんだなとわかるんです」これを念頭において四三五人の「アンケート集計報告」をみると、そこそこ興味深いものがある。

ついでだが、立川談志がインタビューで国会議員のことをけなしたり、猪木やプロレスファンについて言及しながら、「プロレス」そのものを語ることがないのは、それなりの見識というべきか。

『文藝別冊「総特集」いしひさいち

仁義なきお笑い(河出書房新社 二〇一二)』では「この似顔絵がすごい!」と思うキャラクタのアンケート回答(こちらは二九人)がある。なるほど(いしひさいち)についてのアンケートというのは、そもそも成立しにくいものだろう。

大友克洋がインタビューの中で「好きなキャラクタは?」と問われて答える。「うーん、いっぱいあるな。みんな好きだけど、「安下宿共斗」だっけ。あの連中は面白いね。なんか姑息な感じがすごいリアル。いしひさんは、そこにはないよね」

「年譜」では昭和二六年生まれだそうだから、六〇年代後半に吹き荒れた風の外側、だけどすぐく近いところで眺めていた世代だと思う。大友の「そこにはない」という評言は正しい。

「そういえば『ドーナツブックス』を処分したときは子どもに怒られたなあ」などと、ぐたぐた考えながら作業を続けている日々である。

―あ、また揺れた。